小沢昭一的こころ

芸術生活社

小沢昭一的こころ

昭和四十九年六月十日　初版発行

著者　小沢昭一
　　津瀬　宏

発行者　沢藤盛祐

印刷所　幸進社印刷

製本所　ナショナル製本

発行所　株式会社芸術生活社
東京都台東区台東四―二九―一二
郵便番号　一一〇
電話　〇三（八三三）一六六一
振替　東京　三〇六七〇

落丁・乱丁本はお取替えいたします

〈検印廃止〉

0095-1189-1892

© 1974 TBS. Shoichi Ozawa. Hiroshi Tsuse.

まえがき

東京放送ラジオの第一スタジオ。

かなりだだっ広いそのスタジオに附属して、狭ッ苦しいアナウンス・ルームがある。毎週一回、小沢昭一氏はそのアナウンス・ルームに潜り込んで、「小沢昭一の小沢昭一的こころ」という番組の録音をすることになっている。

彼は今日も決められた時間よりもやや早目に、どこで買ったものか、大量の海老煎餅の包みとともにスタジオにやってきた。

海老煎餅というのは悲しい食い物である。これはもうモソモソと郷愁を食む趣きのあるものであって、とてもじゃないが旨いものではない。従って彼は不機嫌である。断じて私の台本が遅れたから不機嫌なのではないと信じて、私は気にしないことにする。責任はかかって、「味の素」の味のする海老煎餅の不味さにある。

本番前の彼の台本の下読みは入念である。だから時間がかかる。その間に、あたかも薬罐の湯がたぎってくるように、彼は仕事をする状態に変化して行く。

上衣を脱ぐ。

「脳天バンド」としかいえないような、不可思議なゴムバンドを被る。

執拗に番茶をガブガブ呑む。従って小便に行く。

その小便の帰りに、われわれと女の話をする。たまに体調の関係で政治の話をしたりするが、概ね卑猥な話題に終始することになっている。彼の体調は、いつもベストの状態に管理されているようである。

この卑猥な話を境に、スタジオは活気を帯びてくる。いよいよ彼はヤルキになってきたのだ。アナウンス・ルームに彼は潜り込む。あたりを片付けたりする。番茶を呑む。体が斜になって、マングースが背中の毛を撫ぜられたときのような目付になる。

すかさず坂本ディレクターが立ち上がる。姿勢だけ馬鹿にいいんだ、この男は。

「小沢さん。まいります」

「お願いいたします」

スタジオに番組のテーマ音楽が流れ、やがて、海老煎餅の匂いに包まれた彼、小沢昭一が口をひらいた。

（津瀬　宏）

「エー毎度御贔屓をいただいております、この『小沢昭一的こころ』。放送二年目に入りまして、ますます珍奇絶倫に頑張っておりますが、思えば私のラジオ稼業も長いもので、一番最初は「上野ォー　ウエノォー」と、ただこれだけ。つまりドラマの中の駅アナ。これで六百円いただいた。当時玉の井のお姐さんにチョンと御挨拶申しあげると三百円。六百円あれば、チョン、チ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ョンでおめでたいわけですから嬉しい金で……。マァすぐ、話は〝抜けられます〟の細道へそれましたが、「ウエノォー」の頃から想えば、いまは長々とラジオでお喋りさせてもらえる。これひとえに皆々様の御後援のたまものでございます。

そんな長いラジオ稼業の間に、ツーといえばカーというか、オといえばマと答えるというか、ばかに気心の合った台本作者先生とめぐり会えたことは、まことに幸せなことでございます。その人の名、津瀬宏。

この方とは、放送劇からジョッキーから、もう何本お世話願ったか分かりゃしない。ですから、年期をかけた一心同体であります。

例えば『……昭一的こころ』はよく旅をして御報告申しあげる。もちろん津瀬氏も御同行願うわけですが、この人何処へ行っても、ただ宿屋にいて酒飲んで寝ちゃうだけ。もうただ飲んでる。私の方はチョコマカ動き廻るのが好きですから、イロイロぼうけんをいたしまして、サテ御報告申しあげようとすればもうグーグー寝ている。芸者にも見捨てられたらしい。それでいて、台本は私のハネ廻ったとおりにチャーンと出来上がる。いや、出来上がりはおそいけど、出来ればパリの台本（パリとは古いけど）。これは一心同体以外のなにものでもないわけであります。

そういうパリの台本を、私メ精一杯……精も不足がちですが、一心不乱に口演させていただいております。今回はその中からいくつかを特選して、皆様の御機嫌をうかがおうという次第。

前口上はこのくらいにして、サ、それじゃボチボチまいりましょうか」　（小沢昭一）

小沢昭一的こころ——目次

まえがき

●中間管理職を考える　7

●秋の北海道何と名付けようか旅　25

●控室を考える　51

●ストリップ荒野を行く　67

●弁ト、弁ト、弁当を考える　87

●男の病について考える　107
●シゴキについて考える　125
●のぞきについて考える　145
●秋の大利根いそぎ旅　163
●日本浴場物語を考える　181
●おおヘアー！　お毛ケについて考える　199
●地方巡業チャンコ旅　219

装幀装画　灘本唯人

中間管理職を考える

小沢昭一の「小沢昭一的こころ」実にどうも恐るべき題名で、なに、そう大それたことをやろうというのではありませんので、所詮は昭和一ケタ族、どちらさまからも疎外されちまった男の、ゴマメの歯ぎしりひとりよがり、おのれの殻に似せて掘った穴に、あなたもどうぞ、といったほどの心持であります。ただね、私、旅をしたいな、なぞと思っておりますよ。風の吹くまま気のむくまま、自分勝手に束縛されず、そこここ歩き廻ってみたい。それと同じ調子で、歴史の上もさまよってみたい。あんまり学校じゃ教えないような歴史のなかに住んでいる、これまたあんまり御推賞出来ないような方のなさったことをたずねてみたい、なぞと思っておりますが、こればっかりは、やってみなけりゃ分かりませんので、ひとえにお引き立てのほどを願っておきます。

*

さて、とっぱじめは「中間管理職を考える」と題しまして、あれこれ思いを巡らせたいな、と思っておりますが、なにせ世の中には、この中間管理職というお職を張っていらっしゃる方はあまりに多い。もうそのへんみんな管理職みたいな風情でありますので、このみなさんのお話をするとなると、日本全国を敵に廻したような気がいたしますが、なに、例によってこっちは興味本位。どうせそう大して調べもせずに、風のたよりを真に受けて喋るのでありますから、どうかお気になさらないでいただきたいのでありますが。

さて、この中間管理職、国語の字引にはまだ出ていないようでありますね。マスコミ用語で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

普及したが国語にはなっていないのでありましょう。学説によれば、本当に偉いのと、本当に偉くないのとの中間に漂っている、偉いんだか偉くないんだか、曖昧なお立場のみなさんをいうとある……怒っちゃいけない、学説なのであります。係長、課長補佐、課長、副部長あたりまでをいうとある。忙しいんだそうであります。矢鱈に忙しいんだそうで、このあたりが、役所、官庁、会社のすべての仕事を切り廻しているという。それでもって、偉いのか偉くないのか、曖昧なのであります。

このへんですよ、中間管理職が甘くせつなくやるせない響きを持って胸に迫ってくるのは。

風のたよりによりますと、われら昭和一ケタの若武者も、いつのまにかスレッカラシになって、関係官庁では中間管理職の課長補佐でおめでたいとある。また最近は、にわかにこの昭和一ケタ課長補佐が世上話題を賑わしまして、汚職、収賄、ネコババと多彩に御活躍だとある。ひと昔前も、この関係官庁の課長補佐さんは話題を騒がしたことがありましたが、あのときは事件を自分のところで食い止め、決して上司を巻き込まないために自分は自殺しちゃうという、自殺要員としてクローズアップされたのであります。さすが昭和一ケタ、伊達にスイトンは食ってないので、ひとのためでなく、汚職でも収賄でも堂々自分のためにやっているところが慶賀に堪えませんが、最近ある新聞社がこしらえました、これら昭和一ケタ課長補佐像というのを眺めて、暗然といたしましたね。

まず、頭は七三を努力しつつ、かなり淋しいとある。これはお互いでありますよ。これを書

いた新聞記者だって、昭和一ケタなら淋しい。
必ず眼鏡とあるな、これもお互いだ。これを書いた新聞記者だって……ま、このさいでありますから、あまりムキになるのはやめますが。
次に着ている背広は典型的ドブネズミとある。胸のポケットに、なぜか、万年筆とシャープペンシルの二本を差している。これは本当でありますね。なぜか差してる。通常はハンカチかなんか覗かせている、あの胸のポケットにであります。
腹はやや出気味とある。これはお互いだ。これを書いた新聞記者だって……いや、言いますまい、言いますまい。
ボーリング、ゴルフ、バーでの気の利いたお喋り、みんな駄目で焼鳥屋で軍歌を唄うのを好むとありますね。遊び下手なんですね。酔うとパチンコなんかしますよ。とにかく黙々とやるのが好きなんです。黙々と働き黙々と結婚し、黙々と子を作り、黙々と課長補佐になり、そして、黙々と消えるのでありましょう。昭和一ケタっていうのはせつないねえ。

*

風のたよりで、こういうお話を伺いましたね。さる高校で、先生が一生懸命教えているのに、生徒がインスタントコーヒーを入れて飲んでいるんだという。なにしろ、この教室の生徒は剛の者揃いでありまして、その前なんか電気ガマで飯を炊いていたというから大したもので。(きっと、コンセントが手近なところにある教室なのでありましょう。なぜそんなに手近なと

ころにコンセントがあるものやら、私はそっちの方が気になりますが）それを見つけて先生が怒った。それは怒るわな。すると生徒がいったそうですよ。

「先生、どうぞ教育する権利を行使して下さい。われわれは受ける義務を一時放棄してますから……」

そんなこんなで、ムシャクシャした先生が帰るとき、ある生徒と一緒になったんですな。ニコニコしているその生徒に先生はこういったんだそうでありますよ。

「こら、三尺下って師の影を踏まずっていうだろ、後ろから来い」

ハイと素直に答えて後ろに廻ったその生徒が、のどかにこういったそうであります。

「あれ、先生。先生の影がありませんよ。ボチボチ駄目なんじゃないですか」

と、まあ、最近の週刊誌に伝えられました現場の先生からの御報告でありますが、なぜか私はこの話を聞いたとたん、部下に囲まれている中間管理職氏の姿を思い出しましたねえ。

昼飯は弁当を持って行こう、としみじみその方は思ったんだそうで。これは、さる管理職さんの打ち明け話であります。打ち明け話を喋っちゃ申しわけないが、是非話したくなっちまったんだから仕方がない。その方は、最近管理職になり部下もかなりいる。管理職というのは、いうならば部下の管理である。従って、あらゆる機会に部下と意見の交換をしなくてはならない、とその方は考えたのでありますね。そこで、昼飯時を利用することにした。昼飯を部下とともに食う。これほどなごやかな意見交換の場はない。他の管理職を眺めてみると、管理職同

志でごそごそ昼飯を食っている、実に怪しからんことだ、とその方は思ったそうであります。この方、根が真面目だから信じて疑わないんでありますね、早速やってみた。上々の首尾で部下一同も喜んでくれる。なごやかだ仲々いい、と思っているうちに、なんとなく、この息苦しいような、キュークツなような状態になってきた。勿論一度に部下全員と食べるわけじゃないから、三、四人ずつ順に、こう廻って来るにしたがって息苦しくなってきたんですね。別に自分で息苦しくなってきたんじゃない。財布が、こう、窒息しそうになってきたのであります。つまり、部下一同、口じゃ払う払うといいながら、誰も自分の昼飯代を払わないのであります。

こらえたそうでありますよ、そこはほれ、根が真面目だからナニクソとこらえた。これは、部下と和を計る大事な資金じゃないか、俺は管理職だ、頑張ろう、と思ったんだそうでありますが、毎昼ごとに入れ代り立ち代り部下に和を計られて、遂にこの管理職は刀折れ矢は尽きて、お昼はお弁当を持って行くべく、そして自分のデスクでひとり淋しく食うべく、真剣に、具体的に、口やかましく、物臭な女房に交渉を開始したと聞きます。結果はまだ聞いておりませんが、だけど駄目だよ、あの女房じゃ……。

現代の中間管理職に比べますと、お侍さんの方の中間管理職は、まことに堂々としておりますね。旗本を束ねる役で御支配役というのがあります。ま、かなり偉いとも言えますが、まだまだ幕閣の組織のなかじゃ中間管理職。これが部下には物凄く偉い。

これは幕末のお話で、ここに、無役の旗本で山脇留次郎さんという方が登場いたします。無

役の旗本、幕末にはこういう方が多かった。つまり、なァんにも勤めのないお旗本。一生哀れなものだったんだそうでありますな。なにしろ、旗本という身分はあってもなァんにも仕事がないんだから、つまりすることがない。なんとか役にありつこう。こういうときは中間管理職に覚えて貰う。あなたの配下には仕事のない私という人間がいるんですよ、なにか幕府の仕事で空いている役があったらはめ込んで下さいよ、と、口には言わねど目に涙。ただもう、朝の七時、その御支配役が江戸城に出勤するとき、お玄関のところに平伏してお見送りするだけでその真情を示す。雨の日も風の日も夏でも冬でも午前七時に両手をついてウッハーッとやる。勿論、自分だけじゃありませんよ、無役の旗本は。ほかにも大勢いる。これがみんな役がほしい。さしあたって他にすることがないから、みんな玄関のところに並んで、ウッハーッとやる。御支配役は知らん顔でさっさといっちまう。

こうやって、毎日欠かさずウッハーッとやりながら裏で金を出す。一役五百両が相場だが、その頃は千五百両かかったといいますね。なにしろ御支配役だってそう偉くないんだから、あっちにいくら、こっちにいくらとバラまかなくちゃならない。山脇さんは、自分の御支配役、小日向山城守っていう人のところに三年通ってウッハーッをやった。金がだんだん利いてまいりますと、朝出かけるとき御支配役が声を掛けてくれる。いえ、別に大したことはいわない。「山脇、今朝は天気がいいな」ぐらい。これを聞くと魂が宙に飛んだという。声をかけてくれたのは可能性があるぞという意味。それっと、どんどん金を注ぎ込む。これじゃ間もなくお番入りで役につけるってときに、肝腎の山城守がどこか他に飛ばされちまったんだ。しかし山脇

さんは頑張って、次の御支配役、小田備前守に日参すること三年。このひとも飛ばされて、後に来たのが山口近江守。これにまた三年通って、遂に「山脇、いよいよお番入りだぞ」と、お許しが出たとたんに、あまりの嬉しさに我を忘れ、ウーンといったっきり卒中を起して四十二歳の生涯を閉じたという話がある。そんなに偉くならなくともいいけど……どうにかならないのかな、中間管理職。

中間管理職はひとり淋しく飲むという。飲めば必ず軍歌を唄うという。酔えば必ずポルノ映画のカンバンを見て、ひとり淋しくパチンコをするという。あなたはそんなことしない？　じゃやっぱり、あなたの話をしてるんじゃないんだなァ……。

*

さて、エリートコース、出世コースに乗りまくっているひとほどこの中間管理職の経験が少いんだそうですね。もう、アッという間に通過していっちゃう。従って、ただもう忙しいばかりでそこにはなんの感傷も漂わないのでありますが、これに反しまして、馬鹿にこの中間管理職が長い方がいるんだ。もう馬鹿な長さ、ずうっとやっているんだ。ことによったら、一生一ミリも先に進まないでこの席に坐っているんじゃなかろうか。こうなってまいりますと、哀愁が矢鱈に漂って来るものであります。第一、女房がうるさくなってくる。最初管理職になったときは、薄化粧してお赤飯炊いて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com